

第4分科会「子どもたちを元気にする飼育委員会活動」

－飼育委員会の活性化は丁寧な飼育から－

高橋信子

はじめに

5年前本校に赴任した時、飼育舎では10羽のウサギが飼われていた。翌年、飼育委員会を担当したが「じゃんけんで負けて仕方なく飼育委員になった」という子が多く、その影響もあってか全体的に子どもたちの活動は消極的であった。「丁寧な飼育」をモットーに飼育委員会担当教員と協力して子どもたちと一緒に飼育活動に取り組んだ結果「じゃんけんで負

けて飼育委員会に入れなかった」という子どもがいるほど飼育委員会の人気が高くなった。その後も毎年多くの子どもたちが飼育委員会を希望して入ってきている。昨年の12月には、10羽いたウサギは老衰等で亡くなり1羽になってしまったが、今年3月、今年度の委員会発足時に33人の子どもたちがこの飼育委員会を希望して入ってきた。

1 5年前の飼育舎と動物、これに関わる子どもたちの様子

飼育舎と動物の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・飼育舎の3室に10羽のウサギが3羽3羽4羽に分けられて飼育されていた。 ・推定年齢3～4歳。皆、名前が無く特に兄弟と思われる4羽のウサギは識別が難しく掃除中に部屋を移動しても気づかず、相性の悪いウサギが同じ部屋に入って喧嘩をしていることがあった。 ・数年前にウサギが多数生まれて困ったためにオスはすべて不妊治療が施されていた。(以前からいた先生方にウサギが生まれた頃の事を聞いたがよく分からなかった。飼育委員会を担当してから獣医師に診てもらったが性別は不明だった) ・足の毛が汚れ腹部のあたりに毛玉が固まって付着していた。生活科のカリキュラムに「ウサギとなかよし」という単元が設定されていたがとても子どもたちにふれ合わせようと思ふ姿ではなかった。 ・太りすぎることを心配して、餌は主に給食の野菜の切り落としを与えていた。ペレットは少量にとどめていた為か痩せていた。 ・餌を差し出しても壁を擦り寄るようにして逃げ去り怖がって近づいてこない。 ・子どもが世話に来ないことがよくあり、担当教員も来られず、餌が与えられていないことがあった。 ・水は与えられていなかった。 ・土日の世話は、週末に多目の餌を置く方法を取っていた。 ・1室4平方メートルの広さに4羽のウサギがいる状態では掃除を一日でも欠かすとひどい状況になるが担当教員の努力により、比較的飼育舎は清潔が保たれていた。 ・夏休み中の平日の世話は、日直の教員が行っていた。
動物に関わる子どもたちの様子	<p><飼育委員会の子どもたち></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「じゃんけんで負けたから仕方なく飼育委員会に入った」と言う子どもを始めとして定番の仕事を怠る子が多かった。 ・飼育委員会の活動は月一回の委員会（組織作りをしたり活動計画を立てたり常時活動の反省）と常時活動（日々のウサギの世話） <p><全校の子どもたち></p> <ul style="list-style-type: none"> ・動物好きの子どもや担当教員の受け持ちの子どもがやってきて掃除を手伝ったり遊んだりしていたが、多くの子どもたちは飼育舎にウサギがいることは知ってはいるが、どんなウサギがいるのか等、特に関心を持っていないようだった。

上記の飼育状況には、改善すべきいくつかの飼育方法が見られるものの、飼育

担当教員の努力によりよく管理されているほうではないかと思う。学校施設とし



て「ウサギ」や「飼育舎」の維持管理が目的の飼育状況としては問題が無いかもしれない。しかし、飼育委員会の子どもたちは飼育活動に消極的であり全校の子どもたちも飼われている動物に関心が薄く、動物が学校で生かされているだけの状況であり、飼育動物や飼育活動に期待される「生き物の命を実感したり生き物

の命の尊さに気づいたりする教育的効果」が見られない。動物飼育は指導要領等に示されているように、生活科、理科、道徳、特別活動等において生命尊重の態度育成に当たって有意義な体験活動である。しかし、「命の大切さを実感できる」飼育活動は、「動物をかわいがって丁寧に世話をする飼育活動」と言われているように「責任を持って餌やりと清掃をする」ことを目的とする「生かしているだけの飼育活動」からはその効果が得られないということを感じた。そこで、翌年から飼育委員会の担当を希望し、「丁寧な飼育活動」を目指して飼育状況の改善に取り組んだ。

2 丁寧かつ適切な飼育に向けて

飼育委員会担当の先生方と学校飼育動物の教育的意義の共通理解を図りながら「丁寧な飼育」をモットーに子どもたちと一緒に飼育活動に取り組んだ。

具体的な取り組み	成 果
<p>●丁寧な飼育の第一歩は土日の飼育ボランティア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼育委員会担当1年目は、土日のどちらかの日に飼育ボランティアを行った。 ・2年目は、飼育担当で分担して行った ・3年目からは、飼育担当以外の先生の協力も得られるようになった。 	<p>☆「土日の世話は誰がしているの」と子どもたちから聞かれたとき「先生がしているから大丈夫だよ」と言えるために始めたことだが、夏の暑い日、空っぽの水入れに水を満たして差し出すとすぐにやってきてぺろぺろいつまでも飲み続けるウサギを見ると来ないではいられなくなる。</p> <p>☆土日に世話をすることで、個々のウサギの観察やより良い飼育方法を考えることができ、気づいたことなどを子どもたちに伝えることができた。</p> <p>☆「子どもたちには毎日世話をするように指導しているのに土日はしなくても良いという説明はできない」ということに他の飼育委員担当の先生方も共感してくれて、土日のボランティアを引き受けてくれた。</p> <p>☆年度末反省に飼育活動の良さをより効果的に生かすことを目的として飼育活動を委員会と学年飼育に移行することを提案した。提案は通らなかったが、みんなで協力してよい飼育に取り組んでいこうということが確認された。</p>
<p>●飼育活動を子どもに任せきりにしない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼育委員会担当を5人に増やしてもらい、担当教員が必ず子どもたちと一緒に活動できるようにした。 	<p>★先生方の協力が得られるようになり自分の世話の回数が減り楽になった反面、ウサギへの思いが薄くなるのを感じた。</p> <p>☆常に教員と一緒に活動することによって、飼育活動は「ウサギの命を守る大事な活動」であることを子どもたちに意識付け、やりがいと責任を持って活動に取り組むように励ますことができた。</p> <p>☆担当するグループの子どもたち一人一人の活動を見取り、子どもたちの頑張りを認めほめることができた。</p> <p>☆ウサギの性格や習性などについて気付いたことを担当教員と子どもたちが共有し、よりよい飼育方法について子どもたちと共に考えることができた。</p>

☆飼育方法の具体的な改善

- ・餌入れや水入れの容器の工夫
- ・餌の適切な分量（軽量カップ使用）
- ・ウサギの健康のバロメーターとして、糞の状態や量の変化に気をつけるようになった。
- ・長靴やゴム手袋を使用（汚れるのを気にせずに掃除に集中できるようになった。）
- ・活動前後の手洗いを励行したり餌入れを蓋付にしたりする。
- ・手洗いの励行や長靴の使用は自分たちのためだけではなく外から動物に病気を持ち込まないためであるという話は、動物の立場で考える視点に気づかせることができた。
- ・糞尿の処理を楽にするために排水溝の改善を試みたが、上手くいかずすのこやダンボール、シュレッターで処理した紙の利用等、あれこれ工夫を試みる。結果、糞や尿が集中している餌と水の回りの下にダンボールを敷き、毎日交換する方法をとっている。

●10羽のウサギに名前をつける

- ・名前をつけることによって、集団としての「ウサギ」ではなく1羽1羽のウサギを識別して丁寧に世話をするようになった。また、できるだけ担当するウサギを決めて世話をするようになった。

☆「レオ、ここを掃除するから、ちょっとあっち行って」と名前を呼びながら1羽1羽のウサギを識別して世話をするようになり「おとなしいからかわいいね」などとそれぞれのウサギの性格にも気づくようになった。

☆1羽一羽のウサギの性格やウサギ同士の関わりを観察して喧嘩をしないような部屋割りを工夫した。近隣校からの申し出を受けて、2羽のウサギを譲ることになった時、子どもたちと共にウサギの関係を考慮し適切に選ぶことができた。2羽のウサギを譲った後、息を潜めるようにして生きていた同室のウサギが日に日に元気になっていくのを見てよい選択をしたことを子どもたちと共に喜んだ。

●ウサギが病気をしたら動物病院へ

- ・ウサギの様子の変異に気づいたときは必ず動物病院に連れて行き治療の様子や病気に関する獣医師からの説明を子どもたちに伝えた。

☆子どもたちは病院で診てもらっていることに安心し、病気について関心を持って聴き納得していた。

*川崎市では学校飼育動物の病気等についての費用に関する予算措置がとられているので安心して診てもらえた。

☆いつも診て頂く動物病院の先生から飼育方法などについて相談することができ、地域に信頼できる動物病院があることは担当教員にとっても心強かった。

★行事や会議、予定外の保護者の教育相談などに追われ、気にかけることもすぐに行けない事もあった。

●ウサギの死や病気を無駄にしない

- ・飼育委員会を担当して初めてウサギが亡くなった時、地域の獣医師さんに子どもたちにとってどうするのがよいか相談したところ「きちんとお別れをさせて埋葬するのが良いでしょう」というアドバイスを受け、飼育委員会の子どもや飼育のお手伝いをしていた子ども

☆お別れ会には飼育の手伝いをしていた子どもたちも楽しみにしている休み時間にもかかわらず駆けつけてきた。集まった子どもたちは、一人一人、冷たく硬くなったウサギの亡骸を撫でてお別れをした。

☆亡骸をはじめて見たり触ったりした子どもたちは、「冷たいんだ」「目がしょぼんでいる」「かわいそう」などと呟き、生きているときはまったく違う姿を静かに見つめていた。

☆このお別れ会の後、「いつの間にか、いなくなったけどあのニワトリはどうしたんですか」と聞いてきた子どもたちがいた。その頃の飼育担当者がすでに転任していたのでよく分からず説明してやれなかった。大人以上に動物のことを気にかけている子どもがいることを心に留めておくと共に改めて飼っている動物の死や病気、事故などをうやむやにはしてはいけないと感じた。

<p>たちに呼びかけてお別れの会を行った。</p>	<p>☆老衰や病気でこの1, 2年の間にウサギが次々になくなったが, 長期休業中に亡くなったウサギ2羽を除き, お別れの会を行い集まった子どもたちがウサギの亡骸を撫でてからウサギを埋葬した。</p>
<p>●お別れ会の趣旨を話し, 教頭先生にも参加を依頼し, ウサギの死は学校の一大事であることを意識するようにした。</p>	<p>☆お別れ会は事前に校内放送等で全校の子どもたちに伝え, 休み時間に自由参加で行なうが, 低学年から高学年まで100人近くの子どもたちが集まってくる。</p> <p>☆前日着任したばかりにもかかわらず快く引き受けてくれた教頭先生の「生き物の命の尊さ」の話を子どもたちはみな静かに聴いていた。これ以後のお別れ会にも必ず教頭または校長が参加し命の重さについて話をしている。</p>

3 飼育委員会活動の活性化

「丁寧な飼育」を心がけて取り組んできたことをベースに「全校のみんなにもウサギをかわいがってもらいたいね」と子どもたちに提案し「ウサギの存在や委

員会の活動を全校にアピールする活動」に取り組むようにした。その活動に対して全校の子どもたちの反応が予想以上によく, それが飼育委員会の子どもの飼育活動への意欲をさらに高めていた。

ウサギの存在や委員会の活動を全校にアピールする活動	取り組みの成果
<p>●全校から名前を募集した</p> <ul style="list-style-type: none"> 全校の子どもたちに飼育舎のウサギに注目してもらうための初めての活動であった。 飼育舎に写真と名前を掲示してウサギを見に来た子どもたちにも分かるようにした。 	<p>☆募集に応じた子どもは多くは無かったが, 飼育委員会の活動がウサギの世話だけではなく, 全校の子どもたちに働きかける初めての活動となった。</p> <p>☆遊びに来た子どもたちも親しげに「サクラがかわいいよ」などと話していた。</p>
<p>●お別れ会の企画, 進行</p>	<p>☆ウサギの死を全校に伝え, お別れ会の準備をしたり進行を務めたりした。この役割を果たすことに満足し, 自身と責任を持って飼育活動に取り組むようになった。</p>
<p>●朝会でウサギの死について知らせる</p>	<p>☆全校の子どもたちが, 飼われていたウサギの話について朝会で知らされたのは初めてのことであった。飼育委員会の子どもが「病院で診てもらったけど手術しても助けられない癌だったことやキララの思い」について話すのをみな静かに聴いていた。普段の朝会の話を書くときの態度と全く違うことに驚いた当時の教務の先生は「子どもたちがぐっと引き付けられていたことに驚いたわよ」と伝えてきた。子どもたちは生き物の死に対して決して鈍感ではないと思った。この先生はその後, しばしば, 自宅から野菜を持ってきて飼育担当の机の上においてくれた。</p>
<p>●ウサギに関する出来事や飼育委員のメッセージなどを模造紙新聞にして掲示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> キララの死 涙目で目の周りが汚れていたサクラの歯の不正交合の治療入院 	<p>☆キララの死に寄せられた子どもたちのメッセージやウサギの入院に関する記事を多くの子どもたちが立ち止まって読んでいた。</p> <p>★月に一回しかない委員会では, 飼育舎の大掃除の他に模造紙新聞を作成したり集会のための発表の準備をしたりするのはなかなか困難であった。特</p>

- ・飼育を引き継ぐ5年生や全校のみんなに向けた6年生のメッセージ
- 全校集会での発表（年に1度）
 - ・スクリーンでウサギを紹介
 - ・飼育しているウサギの特徴の紹介やウサギに関する豆知識のクイズや掃除をしている様子やウサギの抱き方などを劇で表現する
 - ・飼育を引き継ぐ6年生の思いと5年生の飼育活動に向けた意気込みを伝えるメッセージ
- 写生会を企画して、参加した子どもたちの絵の中から選んだ絵を飼育舎に掲示した。また、集会で絵を描いた子の紹介をしたりその様子を模造紙新聞で知らせたりした。
- 活動記録ファイル（個人用）
 - ・月一回の委員会活動では、個々にウサギについて気づいたことや活動の反省などを記述する時間をとり、ファイルするようにした。
- 飼育当番日誌
 - ・仕事のチェックをしたり、ウサギの様子などを次の日の当番に伝達したりする。
- 休み時間ウサギと遊びに来た子どもたちにウサギの抱き方などを教える。

- に時を選ばずやってくるウサギの死についての模造紙新聞作成の為に時間確保は難しかった。
- ☆発表に向けて掃除をしながらウサギの特徴を一生懸命観察したり、クイズを考えるにあたっては、ウサギの習性や体の特徴について熱心に本で調べたりしていた。
- ☆発表した子どもたちは全校のみんなが注目して見てくれてワクワクしたと嬉しそうに感想を話していた。
- ☆先生方からも飼育委員会の子どもの思いが伝わってきたいい集会だったとの感想が聞かれた。
- ☆初めての企画にみんなが集まってくれるか心配そうだったが、事前の宣伝活動や先生方の協力もあって当日はウサギが好き、絵を描くことが好きな低学年の子どもたち喜んで集まってきたのを見て、張り切って準備していた画板を配っていた。活動後、集会や模造紙新聞で意欲的に活動の様子を伝えていた。
- ☆高学年らしい責任感やウサギの健康状態について気づいたことを記入していた。
- ★一週間に一度の飼育活動では、元気であるとかその日の様子の記述にとどまり、様子の変化を捉えることは難しかった。
- ☆ウサギと遊びに来た子どもたちを嬉しそうに迎え、「お尻のところをささえてね」「体にぴったりつけるといいよ」などとウサギを思いやりながら高学年らしく優しく声かけをしていた。

4 取り組みの成果

かつて、本校では「入りたくない不人気の委員会」の代表であった飼育委員会が今や希望者が多く集まる委員会に変わった。子どもたちは小さな動物の命を守ろうと進んで飼育活動に取り組むようになった。さらに、模造紙新聞を作成したり全校集会で自分たちの活動やウサギのことを紹介したりするなどの飼育活動の楽しさを全校に広げる活動にも意欲的に取り組んでいる。このような飼育委員会の活動を見て下級生もまた「ウサギとふれあいたい」「大切に世話をしたい」などの目標を持って進んで飼育委員会に入ってきている。「丁寧な飼育」を心がけ、子どもたちと共に飼育活動に取り組んできたことは子どもたちの動物への愛着を

大切に活動となり活動意欲を高め、委員会活動の活性化につながったと考えている。

また、職員会に学年飼育への移行について提案したことが改めて飼育活動を考えるきっかけとなったり飼育委員会活動の活性化を図ってきたことにより担当以外の先生方も飼育に目を向けてくれるようになった。飼育担当の机の上に野菜を置いてくれる先生は一人だけではない。中には、スーパーからキャベツの葉をダンボールの箱一杯運んでくれる先生もいる。土日の飼育ボランティアには多くの先生が協力してくれている。

子どもたちが生き生きと取り組む飼育活動には、全職員が飼育活動の目的を共通理解し「飼育しやすい動物を子どもた

ちと共に丁寧に飼育する」事が何より大事であることを実感している。

昨年度、ウサギが老衰等により次々に亡くなり、3月に行われた今年度の委員会発足当時には1羽だけになっていた。その1羽が遠からず亡くなることはもちろん予想していたことであり、飼育を続けるかどうか、続けるならどんな動物を導入するかについて年度末に職員会に諮り話し合いをしていた。平成18年度の動物愛護センターの調査では市内の9割の学校で動物を飼っているという結果が出ていたが、最近では動物が死に絶えたことをきっかけに飼うのを止めた学校が少なくないようだ。しかし、本校では動物を飼うことに異論は無く、どんな動物を飼うかについては、「ミニブタ」はどうかという先生もいたが、飼いやすく、学習活動に生かせる動物としてウサギ、チャボを飼うことにした。チャボについてはトリインフルエンザの不安もあったが、年末に届いたパンフレットをもとに過度の心配はいらないと判断し、5月12日に地域のふれあい牧場からウサギ4羽、チャボ3羽を購入した。飼育舎に若い動物が入り、飼育委員会の子どもたちは元気に走り回るウサギに驚いたりチャボの糞や鶏冠、餌を啄ばむ様子に興味を示したりしながら張り切って世話をしている。また、遊びにやって来た子どもたちに嬉しそうにウサギの抱き方を教えたりチャボを腕に乗せて見せたりしている。



5 学校飼育動物の今後の活用について

丁寧な飼育をベースに飼育委員会の子どもたちは委員会活動に意欲的に取り組むようになった。全校の子どもたちも喜んで飼育舎に遊びにやってくる。学校動物の意義が、「子どもたちが大好きな動物がいる環境を維持する」ことであるなら「学校生活の向上と充実に努める」ことを目標とする特別活動の委員会活動として飼育委員会が飼育活動を行うことはその目標に適う活動であるといえる。また、動物が丁寧に飼育されている状況は道徳の動物愛護の態度育成や生活科で動物とふれあう学習活動、図工の写生の教材等様々な学習に活用できる。

しかし、哺乳類や鳥類を継続的に飼育する活動自体が生物教育における生き物理解を深める上で必要な体験であり、新しい学習指導要領の理科において4年生の学習内容として「人や他の動物の骨や筋肉の働き」についての学習が追加され、解説の中で、学校飼育動物の活用の充実を図ることが明記されていることを踏まえるなら、飼育活動を一部の子どもに限られた時間に行う委員会活動にしておくのはもったいないことである。家庭や地域において哺乳類や鳥類の飼育体験を持っている子どもが極めて少ないことも考慮し、学校動物の飼育活動は理科の学習活動の一環としてより効果的に活用していく必要があると考える。

(川崎市立野川小学校教諭)

